

垂見峠の平射臨時砲台 — 大島砲台の要塞砲を転用した本土決戦用砲台(1) —

池田 拓

1 はじめに

宗像市大島には、下関要塞を構成する大島砲台があり、玄界灘や響灘には、昭和10年代に陸軍が多数の砲台を築城した。太平洋戦争末期の1945（昭和20）年、連合国軍の日本本土上陸に備え、これらの火砲が九州北部の本土沿岸部に移設された。これまで実際の移設先や詳細は解明されていなかったが、宗像市と岡垣町の境をなす垂見峠で、そのうちのひとつと思われる遺構を確認した（図1）。本稿は、垂見峠に残る遺構について、他の遺跡との比較検討を通して、太平洋戦争末期に築城された砲台と位置付けることを目的とする。

なお文中の引用文は、読解を平易にするため、漢数字は算用数字に、カタカナはひらがなに、漢字の旧字体は新字体に改めている。

2 研究の方法

遺構が太平洋戦争末期に築城された砲台と位置付けるため、次の方法で研究を行う。

- ① 砲台について記述のある文献資料の集成
- ② 遺跡の調査

- ③ 比較資料となる遺跡の調査
- ④ ②と③の調査結果の比較
- ⑤ 考察

3 調査の結果

(1) 文献資料の集成

a. 臨時砲台の築城と任務

いくつかの資料に、垂見峠付近に2門の加農を備えた砲台があったことが記されている。この砲台が築城されたきっかけは、第16方面軍が1945年5月21日に出した命令「陸西作命甲第百三十六号」である。この命令によって「要塞火砲を転用して北九州沿岸要域に配備させ、同沿岸水域の戦備を急速強化しよう命じた」(防衛庁防衛研究所戦史室1972)。『下関重砲兵連隊史』には、下関要塞重砲兵連隊第6中隊(大島砲台配備)の15糧加農4門のうち2門が「第56軍隷下の第145師団に配属され、福岡県遠賀郡岡垣村内内浦(垂見峠下)に洞窟陣地を構築。備砲直前に終戦」(下関重砲兵連隊史刊行会1985)となったことが記されている。「第五十六軍配備要図 於昭和二十年八月十五日」⁽⁴⁾には、垂見峠付近に2門の加農

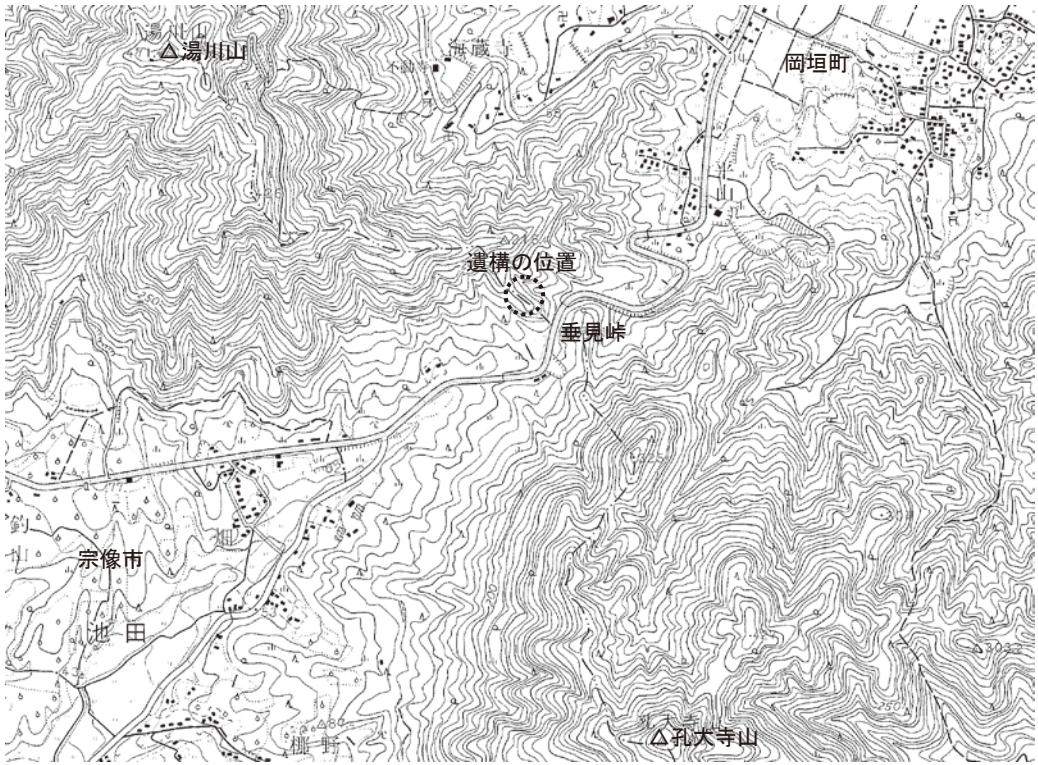


図1 遺構の位置 (1/25,000)

を備えた平射臨時砲台の符号が記載され、首線は芦屋の沖を向いている(図2)。築城は秘匿と砲爆撃(特に艦砲射撃)に耐えるため地下施設とされ、8月中旬には迷彩も施され、洞窟掘開作業の90%が完了していた。

この砲台の任務は、「第三 作戰諸計画 其ノ一 第四百四十五師團戦闘計画(案)」で、「配属海岸砲(15K)を以て(中略)垂見峠附近に陣地を占領し芦屋沿岸及其の北方海上に現出する船艇の破砕」と記されている。

b. 備砲

前述のとおり、この平射臨時砲台の備砲は大島砲台から転用され



図2 資料中の平射臨時砲台の符号

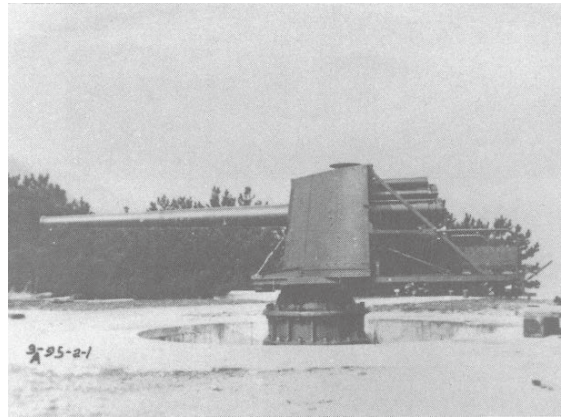


写真1 四五式十五糎加農改造固定式 (佐山 2011)

遺構名	北緯	東経
遺構1	33° 51' 44.66"	130° 33' 58.53"
遺構2	33° 51' 44.78"	130° 33' 57.10"

表1 垂見峠の遺構の経緯度

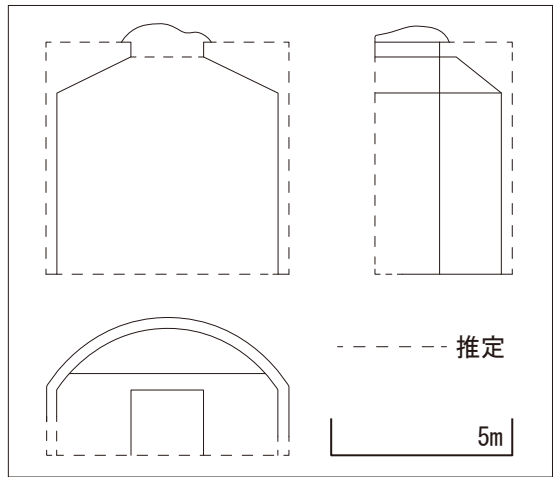


図3 遺構1 (1/200)

a. 位置

遺構の位置は湯川山と孔大寺山の間にある垂見峠から、湯川山方向へ約130m進んだ標高約140mの地点である。

遺構は湯川山と孔大寺山を結ぶ尾根を水平方向に掘削して構築しており、開口方向は2基とも北東側である。開口方向の視界は、小規模な谷を隔てた先の別の尾根が遮っている。GPSを用いた計測 (GARMIN eTrex10j) 結果は表1のとおりで、2基の遺構は間隔が約37m、標高差は約10mである。

b. 各遺構の調査結果

遺構1 アーチ形天井をもつカマボコ形をした鉄筋コンクリート

造の遺構である (図3、写真2)。平面形は幅6.1m、奥行き5.0mの概ね長方形だが、奥壁は中央部に向かって約1m後退する。

高さは床面が埋没しているものの天井までの高さは3.5m以上を測る。奥壁には幅2.0m、高さ1.8m以上の通路様の切り欠きがあり、その奥は0.5m程の奥行きしかなく素掘りの岩盤が露出している。鉄筋コンクリートの厚さは開口部で約0.3m、奥壁の切り欠き部で約0.4mである。壁面や天井には打設時の型枠として使われた木材の跡が残る。

た。大島砲台の備砲は、「四五式十五糎加農改造固定式」(写真1)と「四五式十五糎加農改造固定式特」が2門ずつで(池田2016)、そのうちの2門が転用されたことになる。この2種類の砲のスペックは同じで、砲身口径149.1mm、砲身全長7515mm、最大射程22600m、発射速度は2分間に3発である。

(2) 遺跡の調査

文献資料は、垂見峠付近に平射臨時砲台が築城されたことを示している。次に、遺構の構造を明らかにするため、GPSを使用した位置計測と実測を行った。



写真2 遺構 1 (1/200)



写真3 遺構 1 (1/200)

使用されるコンクリートには5 cm前後の粗い角礫がかなり多く混じっており、さらに一部には木も混ざり込んでいる。コンクリートにはひび割れ防止と経済性向上のため、骨材として礫を意図的に混ぜるが、この遺構の場合そうではなく嵩増しのためという印象を受ける。材質や施工の良し悪しの影響は定かではないが、天井の前端部は崩落し、コンクリートの剝離も激しい。

遺構 2 形状、寸法は遺構 1と同じとよい(写真3)。土砂の流入がより多い状況にあり、奥壁の切り欠き部からは土砂があふれ内部を確認することはできなかった。使用されるコンクリートも遺構 1と同様である。

(3) 比較資料となる遺跡の調査

a. 比較資料の選定

比較資料として、大分県佐伯市の鶴見(鶴御)崎第一砲台を調査した。この砲台を比較資料に選定した理由は、垂見峠の平射臨時砲台とこの砲台に二つの共通点があるからである。一つは时期的なもので、同じ1945年に築城されたこと、もう一つは備砲が同じ規模の加農だったことである。

b. 鶴見崎第一砲台の概要

鶴見崎砲台は、1920(大正9)年から築城が始まった豊予要塞の一部を構成する砲台である。当初は巡洋戦艦の主砲を転用した砲塔砲台^⑤だったが、1942(昭和17)年に事故で失われ、その代わりとして、同年3月から「鶴見崎の突端、現鶴見崎灯台背面の山頂に15センチ加農砲4門を備えた砲台が設けられた。この砲台は鶴見崎第一砲台と命名された：〔中略〕(戦局が悪化した昭和20年3月には)鶴見崎突端の現灯台北側崖に洞窟砲座を築いて砲を移設した」(三重野2010)。「独立混成第百十八旅団歴史」^⑥には、この移設作業は1945(昭和20)年3月1日に着手したことが記されている。

備砲の七年式十五糎加農は、砲身口径149・1mm、砲身長7515mm、最大射程20200mで、大きさは大島砲台の四五式十五糎加農改造固定式と同様である。

c. 調査内容

鶴見崎第一砲台は、豊後水道を眼前に臨む鶴御崎の断崖に築城されている。切り立った崖面に穹窿形の横穴を掘り、鉄筋コンクリー

遺構名	北緯	東経
砲座1	33° 55' 59.00"	132° 04' 57.02"
砲座2	32° 55' 59.49"	132° 04' 57.08"
砲座3	32° 56' 00.12"	132° 04' 57.06"
砲座4	32° 56' 01.12"	132° 04' 57.00"

表 2 鶴見崎第一砲台の経緯度

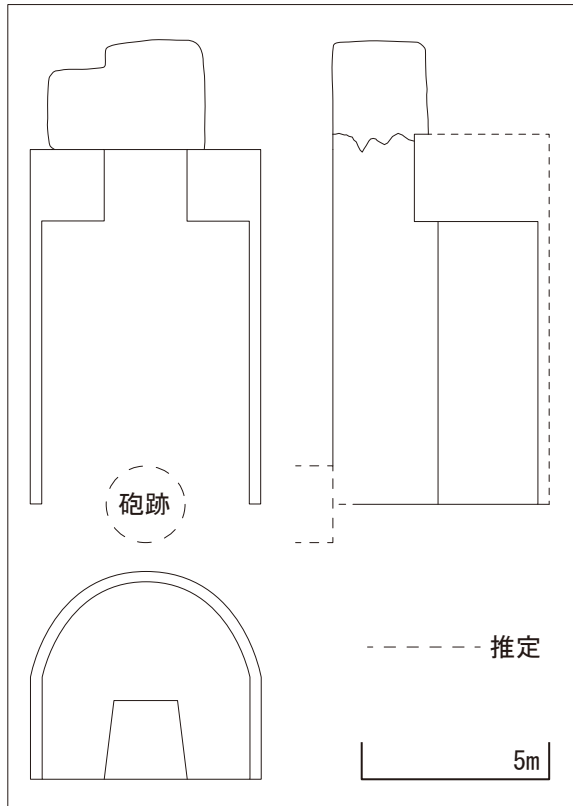


図 4 鶴見崎第一砲台 (1/200)



写真 4 鶴見崎第一砲台 砲座 1

トで補強している。砲座は全部で4基あり、工事進捗の関係か全て現況が異なっている。ここでは各砲座に東から順に砲座1〜4までの番号を付与し識別することとする。

現地調査では、これらの砲座が全て同規格に基づいて築城されたものと考えたうえで、流入土等の影響から、砲座1と砲座2を实测し、図上で合成し資料とした。併せてGPSを用いた位置計測も実施した。

d. 調査結果
各砲座の位置は表2のとおりである。

外観はアーチ形天井の穹窿式で、平面は長方形の掩体部と、砲側弾薬庫か砲員の退避場所の機能を持つと思われるL字形の奥室部で構成される(図4、写真4)。

掩体部は幅5・57m、奥行き7・75mで、最大高5・45mを測るアーチ形天井の鉄筋コンクリート造である。開口部には備砲を外した際にできた堅穴と据え付けのための沈定ボルトの跡が残る。掩体を構成する鉄筋コンクリートの厚さは、岩盤の掘削状況によって一定していないが、概ね0・3m前後である。奥室部へは、掩体奥壁の一部に設けられた幅2・20m、高さ2・14m、奥行き2m前後の通路を通る。奥室部は岩盤を素掘りして造り、幅約2・5

m、奥行き約3・0mの空間と、奥側に向かって左方に直行して掘られた幅2・13m、奥行き約1mの空間で構成される。

使用されるコンクリートは垂見峠の遺構と同様に非常に粗雑で、かなりの箇所で剝離した状況が見られる。

4 考察

(1) 垂見峠の遺構と鶴見崎第一砲台の比較

a. 位置

垂見峠の遺構1、2と鶴見崎第一砲台の位置を比べると、垂見峠の遺構は山間部に位置し、鶴見崎第一砲台が海に直接面する位置にある点で大きく異なっている。

b. 構造

垂見峠の遺構1、2と鶴見崎第一砲台の全体的な構造は、共通点として①斜面（崖面）を穹窿形に掘削した横穴式であること、②厚さ0・3m前後の鉄筋コンクリートで補強されていること、③奥壁に設けられた切り欠き（通路）があることである。一方、相違点として①幅、奥行き、高さの寸法、②平面プラン、③奥室の有無が指摘できる。

c. 材質

使用される鉄筋コンクリートは、骨材として混入される礫がいずれも大きく、セメント量に比べ明らかに多量に思われることで共通する。施工が粗かったのか、これらの礫の隙間には空洞が多く、明らかに強度が低いと思われる、剝離が激しいのも同様である。

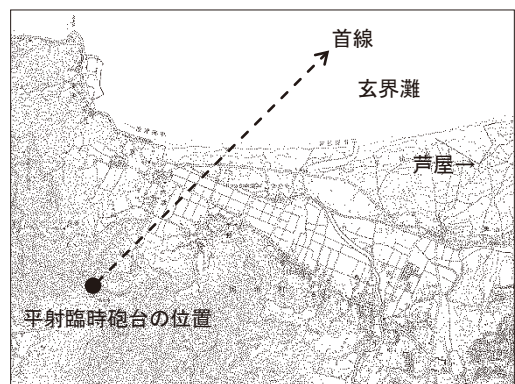


図5 平射臨時砲台の位置と首線

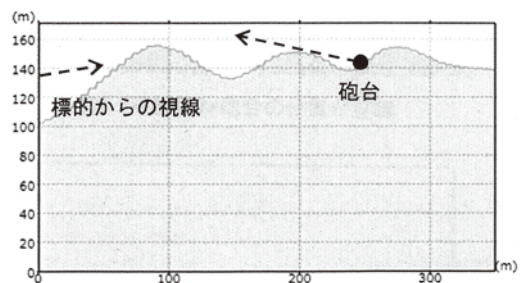


図6 丘陵断面と砲台の位置（国土地理院地図）

(2) 遺構の位置付け

比較の結果、いくつか共通しない点はあるものの、全体の構成は共通しているといえる。

地下式としたのは秘匿と砲爆撃に耐えるためで、低質ながら鉄筋コンクリート造の掩体を有する。鶴見崎第一砲台では、砲を開口部のほぼ真下に据えていた状況が分かることから、垂見峠の遺構でも同様だったと考えられ、遺構の開口方向から砲は北東方向を指向していたといえる。奥室部は垂見峠の遺構には無いが、作業が全体の90%で止まった状況から、完成した場合設けられていたものと考えられる。築城された位置は、垂見峠と鶴見崎で大きく異なるが、砲の射程は海岸線⁽¹⁵⁾を入れ(図5)、さらに眼前の尾根が標的方向からの視線を遮断する(図6)。遺構1と遺構2で高低差があるのは、各遺

構の前面を遮断する、尾根の稜線の高さの変化に対応するためである。

各遺構に砲が1門ずつ据えられたと考えると2基となり、文献資料とも整合性がとれる。また、開口方向が芦屋の沖を向くことから、首線も文献資料と合っている。

以上から、垂見峠の遺構は大島砲台の加農を2門備えた平射臨時砲台と位置付ける。

(3) 課題

この砲台に関する課題として、観測所が未確認であることがあげられる。観測所は、標的の位置・方向・距離等を観測し、「観測の良否は直に射撃の成果に至大の影響を及ぼす」¹⁶ため、なくてはならない施設である。砲台の全容を解明するため、今後も調査を継続する必要がある。

5 おわりに

研究の結果、垂見峠に残る遺構を太平洋戦争末期に築城された平射臨時砲台と位置付けた。北部九州には、この砲台のような遺構が多く残されているものと思われるが、その多くは未だ確認されていない。太平洋戦争末期の日本本土の様相を知るためにも、その解明は必要である。今回の一連の調査のなかで、大島砲台から転用された4門の加農のうち、残りの2門の移転先についてもその遺構を確認したため、後日別稿で報告する。

註

- (1) 平射弾道で遠距離射撃を可能にした火砲。弾丸の初速が速く、砲身が長いのが特徴。
- (2) 本土決戦態勢へ移行するため、1945(昭和20)年1月22日に発足した陸軍の機関。九州方面の各部隊を指揮・運用した。
- (3) 陸16HA(西部軍管区) 参謀部「陸西作命甲第三百三十六号 第十六方面軍命令 福岡 五月二十一日十五時」(昭和20年5月21日)『第十六方面軍作命綴 昭二十・二・二一九・一五』。
- (4) 第五六軍司令部「第五十六軍配備要図 於昭和二十年八月十五日 集成五万分一地形図」(昭和20年11月)防衛省防衛研究所蔵『第五六軍国士決戦史資料 昭二十・一一』。
- (5) 大本営陸軍部「大陸指第249号別冊 国土築城実施要綱 昭和20年3月16日」(昭和20年3月16日)アジア歴史資料センター
Ref. C14060867100防衛省防衛研究所蔵『戦法研究参考資料綴(一)』
- (6) 「太平洋戦争下の岡垣」(岡垣町史編纂委員会1988年)、第五六軍司令部「第四 作戦準備進捗状況 其一 築城」(昭和20年11月)防衛省防衛研究所蔵『第五六軍国士決戦史資料 昭二十・一一』。
- (7) 第四百四十五師団司令部「第三 作戦諸計画 其ノ一 第四百四十五師団戦闘計画(案)」(昭和20年11月)防衛省防衛研究所蔵『第四百四十五師団戦史資料』。
- (8) 15は砲身口径、Kは加農を示す。
- (9) ワシントン海軍軍縮条約(1922年)締結の結果廢艦となった、巡洋戦艦「伊吹」の主砲を転用した砲塔砲台で、現在も砲塔を収めた砲塔井等の遺構が残る。
- (10) 陸軍省「兵器調達並改修ノ件」(昭和17年5月14日)アジア歴史資料センター Ref. C01000285800防衛省防衛研究所蔵『昭和十七年 陸

亜密大日記 第十七号 2/3』には、「豊豫要塞鶴見崎砲台に応ずる分」として七年式十五糧加農の電気照準具一式と射角板4個が記されている。このことから、鶴見崎砲台に七年式十五糧加農4門が配備されたことが分かる。

(11) 独立混成第百十八旅団「独立混成第百十八旅団歴史」(大正15年8月1日〜昭和20年11月13日)アジア歴史資料センター Ref. C14060991400 防衛省防衛研究所蔵『独立混成第百十八旅団歴史』

(12) 砲座3と砲座4は掩体の鉄筋コンクリートを途中までしか打設しておらず、完成状態ではないと判断した。

(13) この空間が弾薬庫であることを明示する資料は無いが、砲台としての機能を考えると必須の設備である。

(14) 半分は埋没していたが、確認した痕跡から復元すると12本のボルト痕があると考えられる。

(15) 岡垣町〜芦屋町に広がる三里松原海岸まで、遺構から約2〜9kmの距離である。

(16) 用兵図書株式会社「砲兵観測通信教範草案総則及観測」(昭和6年7月20日)アジア歴史資料センター Ref. C01001963600 防衛省防衛研究所蔵『永存書類付属 検閲済典範類 昭和6年』

参考文献

池田拓 2016 「大島砲台の研究」『七隈史学』18、七隈史学会

岡垣町史編纂委員会 1988 「太平洋戦争下の岡垣」『岡垣町史』岡垣町、p. 446

佐山二郎 2011 「四五式十五糧加農」『日本陸軍の火砲 要塞砲』光人社、p. 318

下関重砲兵聯隊史刊行会 1985 「下関要塞と下関重砲兵聯隊」『下関

重砲兵聯隊史』下関重砲兵聯隊史刊行会、p. 216

米陸軍省 1998 『日本陸軍便覧 米陸軍省テクニカル・マニュアル 1944』光人社、pp. 371-372

防衛庁防衛研修所戦史室 1972 『戦史叢書 本土防衛作戦(2)九州の防衛』朝雲新聞、pp. 342-343

防衛庁防衛研修所戦史室 1980 『戦史叢書 陸海軍年表 付 兵

語・用語の解説』朝雲新聞、p. 366

三重野勝人 2010 「戦跡「豊子要塞」の実像を探る」『別府史談』23、別府史談会、p. 48

(いけだたく 原始・古代部会)